

## 横須賀美術館運営評価委員会（平成 29 年度第 1 回）

日時：平成 29 年（2017 年）7 月 5 日（水）14 時～16 時

場所：横須賀美術館 ワークショップ室

### 1 出席者

委員会	委員長	小林 照夫	関東学院大学名誉教授
	委員（委員長職務代理者）		
		菊池 匡文	横須賀商工会議所専務理事
	委員	柏木 智雄	横浜美術館副館長
	委員	樺澤 洋	市民委員
	委員	木下 美穂	市民委員
	委員	河原 政子	横須賀市立小原台小学校校長
館長	教育総務部長		阪元 美幸
事務局	美術館運営課長		佐々木 暢行
	美術館運営課広報係長		相良 泉
	美術館運営課管理運営係長		高橋 博之
	美術館運営課（学芸員主査）		工藤 香澄
	美術館運営課（学芸員主査）		富田 康子
	美術館運営課（管理運営係）		秋山 卓雄
	美術館運営課（学芸員）		杓沢 耕介

### 欠席者

委員会	委員	草川 晴夫	観音崎京急ホテル取締役社長
-----	----	-------	---------------

### 2. 議事

（1）平成 28 年度の運営評価について

（2）平成 29 年度の事業計画書について

その他

### 3. 会議録

#### 【開会】

〔事務局・佐々木課長〕：定刻になりましたので、「平成 29 年度 横須賀美術館運営評価委員会 第 1 回」を開会いたします。開会にあたりまして、横須賀美術館館長事務取扱、教育総務部長 阪元よりごあいさつさせていただきます。

〔阪元部長〕：4月1日付けで教育総務部長、そして横須賀美術館長を拝命いたしました阪元でございます。本日は、ご多忙の中、平成 29 年度 横須賀美術館 運営評価委員会 第 1 回にご出席たまわり、誠にありがとうございます。また、本日の会議開催にあたり、委員の皆様には、お忙しい中、短期間で平成 28 年度事業に対する二次評価を行っていただき、重ねてお礼申し上げます。本日、皆様に二次評価のご議論をいただき、28 年度の評価が確定いたします。

横須賀美術館は開館から、4月28日で丸10年を迎えました。今年度は、開館10周年を記念した各種行事を実施してまいります。皆様のご意見のひとつひとつを今後の運営に生かし、さらに一層の努力や工夫を凝らし、美術館の目標でもある「市民に親しまれる・愛される美術館」を目指し引き続き努力してまいります。それでは、本日もよろしくお願いたします。

〔事務局・佐々木課長〕：ここで少しお時間を頂戴しまして、事務局職員の異動がありましたので、紹介をさせていただきます。市の人事異動により前管理運営係長の上野が資産税課へ異動いたしました。新たに管理運営係長として異動してまいりました、高橋です。

－（高橋 自己紹介）－

では、進行を進めさせていただきます。本日は、草川委員より欠席の連絡をいただいております。次に、本日は傍聴の方が1名いらしております。それでは、資料の確認をさせていただきます。

－（資料確認・略）－

以上が本日の資料です。不備等ございませんでしょうか。

それでは、小林委員長、議事の進行をお願いします。

#### 【議事（1）平成 28 年度の評価について】

〔小林委員長〕：それでは、次第に沿って、議事を進めさせていただきます。「議事（1）平成 28 年度の評価について」事務局は評価の進め方、報告書の体裁等について説明をお願いします。

〔事務局・佐々木課長〕：資料1「平成 28 年度 評価報告書（二次評価まとめ）」ですが、皆様からお送りいただきました二次評価の結果を事務局でまとめたものです。この資料を

もとに、後程ご議論をいただきたいと考えます。ご承知のとおり、①から⑧の目標があり、それぞれに「達成目標」と「実施目標」があり、16の評価項目となっております。

次に、二次評価確定の進め方について、ご提案させていただきます。事務局からは、最初に①の目標について、一次評価及び委員から頂戴した二次評価の説明を簡潔に行います。委員の皆様には、委員会としての二次評価についてご議論いただき、評価を確定していただきます。以降、順次目標ごとに繰り返し、進めていきたいと考えます。

また、評価報告書の体裁ですが、昨年どおり、コメントは同様のご意見を1つにまとめ、すべて掲載をしたいと考えます。よろしければ、いままで通り、コメントの後にカッコ書きで記名をさせていただきたいと考えております。

[小林委員長]：では、進め方、評価報告書の体裁についてですが、いかがでしょうか。それでは、まず目標①から、事務局は説明をお願いします。

[事務局・相良]：それでは、資料1「評価報告書 二次評価まとめ」及び、「評価報告書 一次評価」に基づき、目標ごとに説明申し上げます。評価報告書（一次評価）の1頁をご覧ください。私からは、「I 美術を通じた交流を促進する」のうち、「①広く認知され、多くの人にとって横須賀市を訪れる契機となる」の一次評価について、説明させていただきます。まず、平成28年度は、達成目標の年間観覧者数100,000人に対し、実績は、108,413人となりました。達成率108%と目標を上回りましたが、前年比では減少し観覧者数11万人を切っていることから「A」評価といたしました。平成28年度はファミリー層にも親しみやすい「さくらもこの世界展」、「自然と美術の標本展」を開催しましたが、両展覧会とも草川委員のご指摘にあるとおり今年の「ウルトラマン創世紀展」のような観覧者数3万人を超えるような結果までは届かなかったことが観覧者減に響いたものと考えております。また柏木委員ご指摘のとおり、「女性を描く」展につきましては、観覧者数の目標を大きく下回りました。目標を下回った要因としては、マティスやルノワールなどの目玉となる作品もありながら、展覧会の魅力やイメージを上手くアピールできなかったこと、チラシ配布やポスター掲示など市内の小中学生を含めて市民向けの宣伝活動が不足したことであると分析しています。また観覧者数見込みについても期待が高すぎた感も否めません。今回観覧者数の目標の参考としました「ストラスブル美術館展」（平成24年度開催）では観覧者数2万4千人を達成しておりますが、「女性を描く」展と比較すると開催時期が夏休みであったこと、また観覧料金の設定も低めであったことの違いがありました。本展覧会の結果についての分析は、より精査して今後に生かしていきたいと考えています。

次に、2頁をお開きください。実施目標の「様々な広報媒体の特性を生かして、効果的な広報活動を実施し、交流を促進する」ほか4件ですが、一次評価としましては、各目標についての評価を総合して検討した結果、無料での情報掲載数は目標に達しませんでした。ツイッターのフォロワー数、商業撮影の件数等が目標を上回ったことから「A」評価といたしました。なお個々の実施目標の結果状況についてはこれから順に説明いたします。

3頁をお開きください。実施目標の1番目「様々な広報媒体の特性を生かして、効果的な広報活動を実施し、交流を促進する」については、(1) 訴求活動による集客促進をご覧

ください。3頁の表に記載のとおり新聞雑誌等への無料での情報掲載は192件と各媒体の合計は目標の220件を下回りました。ツイッターのフォロワー数は8,803人で昨年度に比べ倍増しています。今後もフェイスブックも含めSNSの特性を生かした情報発信に努めていきたいと考えております。

4頁をお開きください。実施目標の2番目「各種イベントを開催し、展覧会以外の要因での利用を増やす」については、(2) イベント開催など展覧会以外の要因で利用者を増やす取り組みの推進をご覧ください。新規の企画も含め記載のとおりイベントを行い、多くの方のご参加をいただきました。また年間パスポートや前売券の販売状況は表に記載されているとおりです。実施目標の3番目「外部連携を推進し、様々な機会と場所を捉えて、美術館の情報を発信する」については、(3) 外部連携の推進をご覧ください。記載のとおりカレーフェスティバルなどイベントへの協賛、観音崎フェスタへのブース出展、町内清掃などの地域活動への参加など、他部局や民間事業者、また近隣地域との連携などを積極的に進めたほか、平成28年度からはレストランアクアマレの食事券と美術館観覧券をセットにしたふるさと納税の商品提供を始めています。

5頁をお開きください。実施目標の4番目「旅行会社などへの働きかけを通じて、団体集客を促進する」については、(4) 団体集客の推進をご覧ください。平成28年度は、前年に引き続き団体観覧者数は減少傾向にあり、前年増加していた企業、町内会、介護施設、学校といった受注型企画旅行も減少しています。募集型企画旅行も含め、今後も団体集客の推進に努めたいと考えております。最後に実施目標の5番目「商業撮影の受入と誘致を推進し、美術館のイメージアップを図る」については、(5) 商業撮影の受入と誘致をご覧ください。イメージアップと認知度の向上を目的とした商業撮影は、例年並みの数字で、目標としていた30件を達成しました。テレビCMやプロモーションビデオの撮影など美術館の宣伝効果につながる撮影も多数あり、時間外での撮影立会いなど事業者のニーズに合わせた対応が効果として数字に表れていると感じています。私からの説明は以上です。

[小林委員長]：ありがとうございます。美術館側としては、今説明いただきましたように一次評価をAと評価されました。達成目標で樺澤委員がS評価とされていますので、こちらについて説明願いたいと思います。

[樺澤委員]：数字というものは一番説得力のある評価となるわけですが、確かに過年度からの入館者の推移を見ますと少し昨年度より減少していますが、今日これから議論いただく内容も頭に入れながら、どのように評価しようかと考えました。昨年Sというハイランクの数字が入りまして、確かに昨年より入館者は減少していますが、関係各位の努力は常日頃良く伺っておりますし、Sの範疇に入って良いのではないかと改めてこのように評価した次第です。

[小林委員長]：柏木委員もコメントをされていますが、説明いただければと思います。

[柏木委員]：総体でみれば目標数を上回っておりますのでA評価で良いと思います。個別

に目標に満たなかったもの、特に著しく満たなかったものについては、その原因の分析をそれぞれの展覧会の後になさった方が良いかと思っております。

〔小林委員長〕：他にご意見がありましたらどうぞ。達成目標についていかがでしょうか。樺沢委員はSを付けてくださったのですが、全体としては一次評価が妥当とお考えになっているようですので、二次評価につきましてもA評価ということでよろしいでしょうか。

では次の実施目標について、皆さん評価はAとなっていて、コメントも書かれていますので説明いただけますか。柏木委員からお願いします。

〔柏木委員〕：私のコメントは質問である訳ですけれど、広報的な面で資料を見ますと、その満足度というのは比較的高いにもかかわらず、集客に結びつかなかったことは先程事務局から説明がありましたとおり、広報面で魅力を伝えるにあたって何か手法として足りないところがあったと思います。そこをよく分析された方が良いと思います。

〔小林委員長〕：全体としては良くやっているのので、評価としてはAで良いということですね。

〔柏木委員〕：評価としてはAです。

〔小林委員長〕：もしこの点を克服されると、評価点は柏木委員の中では非常に高くなるということでしょうか。

〔柏木委員〕：そうですね。高く評価します。

〔小林委員長〕：分かりました。河原委員お願いします。

〔河原委員〕：横須賀市に美術館ができて10年ということで、これは私たち市民にとっても大変うれしいことで、広くみなさんに知られてきたなと感じているところです。説明にもありましたとおり、新聞であったりチラシであったりという従来の方法に加えて、チラシの種類、素材や構成等も工夫されていたり、またカレーフェスティバルであったり、近隣地域との連携等々、また近年のSNSといったような新しいメディア等も活用されているということで、様々な努力をされているなと感じています。では今後こういった手立てがあるかというところは大変難しいとは思いますが、気持ちを常に前向きに持っていただくと嬉しいと思います。

〔小林委員長〕：他にいかがでしょうか。菊池委員何かございますか。

〔菊池委員〕：特にありません。

[小林委員長]：ここでは委員の皆さんはAとなっておりますので、二次評価について特に問題ないようですので一次評価と同じAということでよろしいですか。ではAと評価とさせていただきます。

[小林委員長]：では次の②についてよろしくお願いします。

[事務局・沓沢]：一次評価書の7頁をご覧ください。「②市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる」について、説明いたします。

まず達成目標は、「市民ボランティア協働事業への参加者数延べ2,000人」です。平成28年度の延べ参加者数は2,662人となり、目標を上回りましたので、一次評価を「A」といたしました。プロジェクトボランティアの活動では、例年は3回のところ、28年度は秋にもイベントを開催し、年4回の開催となりました。企画展で海の広場を占有するため、冬イベントの規模を縮小したことに対する特別な措置でありましたが、結果として参加者数は増加しております。ギャラリートークボランティア、小学生美術鑑賞会ボランティアの活動では、28年度にボランティアさんを新規募集したため、参加者数が増加しています。

次に実施目標は、

- ・市民が美術館に親しみを感じ、訪れる機会をつくる。
- ・市民ボランティアが、やりがいをもっていきいきと活動できる場を提供する。

の2点です。一次評価は「A」といたしました。新規ボランティアの加入によって、新鮮な気持ちで活動ができているようです。ギャラリートークボランティアと、小学生美術鑑賞会ボランティアはそれぞれ研修を行っていますが、希望者は横断して参加することも可能で、交流の場ともなっています。プロジェクトボランティアの活動では、ボランティアの経験値が高まったことにより、準備や当日の進行は着実に、スムーズに行われるようになっていきます。また、これまで当日ボランティアだった人が準備段階から参加してくれるようになるなど、活動を通じた交流が広がりを見せています。②についての説明は以上です。

[小林委員長]：ありがとうございました。今の説明で質問はございませんか。では、この②の「市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる。」について検討していきたいと思えます。達成目標について菊池委員からコメントがありますので、よろしくお願いします。

[菊池委員]：今の説明にあったとおりでと思います。ただ、目標設定にした延べ2,000人という数字が、来館者そしてボランティアの方々を満足させられる適度な設定だと判断すると、今回2,600人で、3割を超える位増えているということは、S評価とする基準は何かと考えた訳ですね。そうすると、私は今回2,600人でSにしておりますけれども、Sの基準というのはそれぞれの判断で変わってしまうのかなと思って、あえて自分の判断基準で今回Sにしました。結局、数が増えるということは、その分オペレーションが大変になって、数だけを追い求めると質が担保出来なくなるという状況があると思います。最初に言いましたが、2,000人が適度なレベルであれば、このレベルがSの評価で良いのかなと数

値的に思います。

[小林委員長]：ありがとうございます。私の方は、ただ単に数の論理をまず重要視して、今のこういう状況の中で、協働事業への参加数が、実際に増加しているというのは、積極的な働きかけがあったからだろうと評価させていただきました。すごく頑張っているということで、私としてはSを付けさせていただきました。菊池委員と私がSで、後の皆さんはAになっていますが、ご意見ございましたら発言していただきたいと思います。よろしいですか。

数の論理で評価をしてはいけませんが、特にA評価をなさった方の中で、特に意見もないようですので、ここは一次評価通りAにさせていただく提案をいたしますが、菊池委員よろしいですか。

では、この達成目標についてはAにさせていただきます。

[菊池委員]：それで良いのですが、ひとつ確認しておきたかったのは、先程申し上げた質の担保についてどのように把握されているか、参考として聞きたかったのです。2,600人になったことによって、オペレーションもうまくいくし、来館者も満足度が上がって、ボランティアの方々も喜んでいる。新陳代謝もある程度起きている。では3,000人になったらどうなるのか、主催者側として考えているのか。そのようなことを聞いておけば、来年の評価につながるのではないかと思います。

[小林委員長]：ではこの評価をAという前に、今そのような質問が出ましたので、美術館側でお話し願えればと思います。

[事務局・沓沢]：ありがとうございます。プロジェクトボランティアの活動については、平成28年度は例年3回のところ、4回実施しました。それは、冬に、海の広場に作品を展開させて、光らせるというようなイベントを例年行っていましたが、それができない代わりとして、秋に小規模なイベントを行いました。年4回を毎年できるかという、菊池委員がおっしゃったようなオペレーションの部分で、なかなか難しいのではないかと思います。普通ならば年3回でも自転車操業的になりますが、4回実施したところです。

人数の問題ですが、プロジェクトボランティアだけの部分で、27年度と比べますと、およそ18%増になります。208人ほど増えています。年3回であったものを4回にした訳ですから2割5分、3割増えても良い訳ですが、それ程は増えていない。やはり参加者数の限界を示しているのではないかと思います。

一方で、ギャラリートークボランティア、小学生美術鑑賞会ボランティアは、新たな参加者、担い手の方が現れて、研修等の活動が活発に行われたことから、延べ参加者数が増えているものと考えています。

[菊池委員]：それは良い形で、ボランティアさんの活用やプログラムが組み立てられて喜んでもらっているということで良いとは思いますが、先程申し上げましたとおり、これをもっと

充実させて、3,000 人位にするという目標を立てた時に、本当に上手くいくのでしょうか。今がぎりぎりのラインでやっているとする、そのラインをSにしておかないと、いつまでもそれを続けなければいけなくなって息切れがしてくる。今度はそれが逆に負のスパイラルになっていくことは間違いないので、そこを評価委員会としても、ある程度の基準を設定しておかないと、増えたから良いとか、減ったからダメとかいう感覚で行ってしまうと少しまずいかなと感じました。今回の評価がAということであればそれで良いのですが、今後の参考基準としてはある程度持つておかないと、評価がばらつくのかなと思っただけです。

〔小林委員長〕：いかがですが、何か考えていることがありますか。

〔事務局・沓沢〕：私どもの方からは、例年にないような活動をしたということだけ申し述べておきたいと思います。

〔木下委員〕：評価委員とともにプロジェクトボランティアとしても参加させていただいている現場の人間として、今回A評価とさせていただきました。理由としては、確かに2,000人を超えて、内容も充実した形で、やりがいをもってやっていますが、この表でも分かるとおり、当日ボランティアというのが少しずつ減っていて、結局、現場のプロジェクトボランティアがものすごく一生懸命やっているような状態で、どちらかといえば、もっと人が欲しいくらいの感覚なのです。ですから、もっと人数が増えてやっていけたら良いなと思っています。その余力をとった関係でA評価にさせていただきました。確かに充実はしています。そこだけ見れば人数的にも2,000人を超えて良いのですが、現場としては難しいところだと思います。

〔小林委員長〕：ありがとうございます。やはり評価というのは、数の点だけで考えてしまう嫌いがありますね。ですから、今2,000人なら今度は2,500人位集めたいという気持ちもある。一方で、ボランティアをやってみようかと考えている人への教育とか、実際に携わる方の力量とか、そのようなことが意見として出ていますので、目標設定の中で、そうしたボランティアの質の問題などを含めて、今後考えていただくことも必要かということをお付記させていただき、A評価ということはいかがでしょう。そういうことでよろしいですか。

では次の実施目標についてですが、これについては柏木委員がSと評価していますのでお話しください。

〔柏木委員〕：先程議論した部分については本来、数値目標というのが、あくまでも判断の基準となる訳で、菊池委員からもご指摘がありましたけれども、いったい目標に対してどれ位の増になったらS評価がつけられるのかという基準を設けておかないと、なかなか難しいところがあるかと思いました。一方で実施目標というのは、内容の質の部分の評価するということになりますので、私は「一次評価の理由」以下、各個別の、美術館側の評



価を見る限りでは、かなり良い評価をしても良いのではないかと判断いたしました。

[小林委員長]：菊池委員いかがですか。コメントをされていますのでお願いいたします。

[菊池委員]：先程の数値目標についてはS評価をしていながら、この実施目標についてはA評価とさせていただいています。ここにもオペレーションという言葉を使っていますが、増える、増えないという基準と同調していくのですが、増えることによって質がどう改良されていくのかという部分があって、やはり増えた部分に対して、先程木下委員から発言があったように、当日ボランティアがなかなか増えないといったことが多少弊害となっていたりする。オペレーションに気を配りながらやっていると、質の方も上がるのではないかというのが、この中に見えた部分があって、それで私は逆にあえて、数が増えて、増えた分の良さががどういう効果につながったのかという部分が明確になっていけば、年3回を4回にしたことによって、来館者にどういう満足度をプラスアルファできたのかとか、そういう内容が加えられていけば、同様にSにしたと思うのです。そこの打ち出しが、数の達成目標の数字と質とがリンクできなかったというところが、Aにした理由です。

[小林委員長]：美術館側の立場としてはいかがでしょうか。記載事項云々というお話も出てきましたので。

[美術館・沓沢]：質の担保という面から申しますと、10年やってきて、長く携わってくださっているボランティアの質はかなり向上していると思います。それが、プロジェクトボランティアのイベントの円滑な運営とか、また、年4回できるということについても、練度が高まって皆さんが準備をあまり失敗なく進められるようになってきていることから可能になっていると思います。それと、先程木下委員がおっしゃったような、新しい方が参加してくれるかどうかということは、また別の問題だとは思いますが、質の向上により数が増えていることにつながっていると、プロジェクトボランティアに関しては思います。ギャラリートークボランティア、小学生美術鑑賞会ボランティアは、担い手が平成28年度に関しては増えて、これから新しい方については、研修等でスキルを高めていただく段階ではないかと考えております。

[小林委員長]：なかなか難しいですが、菊池委員は好意的に考えてくださって、実際に数を多くしたけれど中身が問題ということで、達成目標の時の意見と重なり合うということですね。このあたりも、もう少しはっきりと見えてくれば当然Sという感じがいたします。

[菊池委員]：そういうことですね。

[小林委員長]：分かりました。河原委員も大変好意的に書いてくださっています。よろしくお願いいたします。

[河原委員]：実施目標の一つ目の「市民が美術館に親しみを感じ、訪れる機会をつくる」というところに着目をしました。美術館を初めて来る子どもたちが沢山いると思うのですが、これ1回だけではなく、これから先成長して将来的に何回も訪れて欲しい、色々な美術館にも行って欲しいと思うのです。マナーや鑑賞態度について初めて知るチャンスと思われるところで、クラスごとにボランティアさんに付いていただけるということは大変ありがたいと、感謝の思いと、「次年度への課題」において、よりサポートできる態勢を整えられるよう検討を進めるとありますので、期待を込めて書かせていただきました。

[小林委員長]：他にご意見ございませんか。コメントのある委員の方だけにご意見求めています、ご意見がございましたら遠慮なくどうぞ。今度の評価はある意味でなかなか難しいですね。菊池委員もAと評価されていますが、非常に好意的にとらえられている。河原委員も、非常に感謝の念を込めて、A評価としつつも、非常に良いという部分があるようです。いかがでしょうか、全体的にみて、Aと言われている委員の方々の問題をクリアするように、次年度楽しみにして、今回は一次評価通りAとするということで、よろしいでしょうか。

では二次評価をAとさせていただきます。達成目標A、実施目標Aということです。

[小林委員長]：では目標③「調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす」についてお願いします。

[事務局・工藤]：それでは「評価報告書 一次評価」11頁をご覧ください。目標③「調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす」について説明させていただきます。達成目標は「企画展の満足度 80%以上」となっておりますが、平成28年度の企画展満足度は最終的に88.2%となり、目標を達成いたしましたのでAとさせていただきます。全体の数値としましては80%を超えておりますが、目標未達の展覧会について分析するようにとのご指摘がございましたのでお答えいたします。

「女性を描く」展の満足度の数値は全体では80%を超えましたが、「解説・順路」という項目については65.1%という低いといえる数値になっております。またアンケートからは「キャプションの漢字が読みにくい」というご指摘を受けております。これにつきましては、1～2年前から解説について改善の余地があるということで、取り組んでいるところでございますが、展覧会によっては他の館と共同でキャプションを作っていく過程で、なかなか文字の大きさまですりあわせができない、あるいは作品の保存のために室内を少し暗くしてしまったためにキャプションの文字が見づらい、解説の文字が見づらいというご意見があり、おそらくそうしたことが、65.1%という低い数値につながったのではないかと分析しております。今後なるべくお客様が見やすいような解説・順路ということに努力してまいりたいと思っております。

続きまして実施目標は、

- ・幅広い興味に対応するようバランスをとりながら、年間6回（児童生徒造形作品展を含む）の企画展を開催する。

- ・所蔵品展・谷内六郎展をそれぞれ年間4回、テーマをもたせた特集を組みながら開催する。
  - ・知的好奇心を満たし、美術への理解を深める教育普及事業を企画・実施する。
  - ・美術への興味や関心が深まる美術関連の資料（図書、カタログ等）を、図書室で収集・整理・保管・公開する。
  - ・資料が探しやすく、快適に利用できる図書室環境を維持する。
  - ・主として所蔵作品・資料に関する調査研究を行い、その成果を美術館活動に還元する。
- となっています。

平成28年度につきましては年間6回の企画展、年間4回の所蔵品展、谷内六郎展を、テーマをもたせながら開催してまいりました。教育普及事業につきましても展覧会にあわせた講演会、アーティストトーク、各種ワークショップを開催してまいりました。こうしたことから、実施目標につきましてもAとつけさせていただきました。

〔小林委員長〕：ありがとうございます。達成目標は「企画展の満足度80%以上」ということでして、菊池委員からコメントが出ておりますので、Sにした理由等々お話を聞ければと思います。

〔菊池委員〕：今事務局から細かい分析が出ておりましたけれども、全体を通して年々満足度が向上していて、ばらつきも大分高止まりしている部分がある。ということは、主催者側の狙いと、来館者の方の感性が概ね一致している状態にあるのかなと思ったわけです。それはたぶん主催する側としても一番望む環境ではないかと思いましたがSにしました。柏木委員がご記入されているように母数が少ないので何ともいえないのですが、安定感のある企画展が狙い通りに展開されているということであえてSにしました。

〔小林委員長〕：ありがとうございます。柏木委員、いかがでしょう。

〔柏木委員〕：私は企画展を作る立場にあるので甘くなりがちかもしれませんが、平成25年度からずっと満足度は上昇し続けておまして、今年度88%という数値、90%に近い数値ということですので、このあたりでS評価を出しても良いのではないかという気がいたします。個別については、例えば美術館の方から説明のあった「女性を描く」についての分析がございましたけれど、全体として展覧会の満足度は80%を超えているわけです。いずれも入館者数が未達だったものも含めて満足度は非常に高い、ということですので、その意味でSでも良いのではないかなと思いました。

〔小林委員長〕：各美術館でも満足度に対する調査は行われているのですか。

〔柏木委員〕：行われています。

〔小林委員長〕：その時に母数というのは、大体どの位ですか？

〔柏木委員〕：それほど高くはないです。集中的に人を投下して、アンケートをすればある程度の母数を獲得できるのでしょうけれども、自主的なお客様のアンケートに基づいていますので、例えば次の展覧会の無料鑑賞券が当たるといようなことは付けたりするのですが、それほど高くはないです。

〔小林委員長〕：そうすると、1%くらいの母数の数値結果ではあるけれども、ある意味ではいろいろ考えるにあたって比重にしても差支えない母数だと考えてよいわけですね。どうぞ、他に委員の皆様、ご意見ありましたらご遠慮なくご発言ください。

〔木下委員〕：私もやはり、「女性を描く展」の「解説・順路」が65.1%で、随分低いなど思ってしまった点からA評価とさせていただいたのですが、他の館と見比べる水準もよく分かりませんし、柏木委員のお話を聞いても、今回A評価とさせていただきましたが、S評価でも良いのではないかという考えも起きています。

〔小林委員長〕：他にいかがですか。草川委員は今日ご欠席ですがコメントがあります。「改善の余地があると判断され、改善が可能ならば、早急に実施すれば満足度は大幅にアップすると思う」と、取り組みの姿勢に関する問題を含めてコメントしてくださっています。この様なことを踏まえると、皆さん考えている様な形で一次評価どおりAということでもよろしいのかなという気がするのですがいかがでしょうか。Sを付けてくださった二人の委員はいかがでしょう。Aでも、というようなでお気持ちでよろしいですか？

〔柏木委員〕：結構です。

〔小林委員長〕：菊池委員いかがですか。

〔菊池委員〕：これもそうかなと思うのですが、年々、ばらつきも出てきてしかるべきと思っているものが、徐々に向上し安定感があるということは、いわゆる横須賀美術館という性格が、それなりに浸透している、評価が上がってきているかなと思うので、今回はAでも良いのですけれども、もう1度しっかりと見ないと、先程のことに戻りますけれども、「どのレベルになればSになるの？」ということになってくると評価は非常に難しい。これはある意味この美術館が10年やって、評価しにくくなっているのは、裏を返せばそれだけ成長している見えるので、我々評価する側も、そろそろしっかりとした基準というものを、今まではばらつきがあれば、基準として見やすかったのですが、これだけ安定してくると、もう少し評価というものにも、我々ももう少ししっかりとレベルを合わせなければいけない、という時期に来たと、そのような感想をもっています。

〔小林委員長〕：先ほども少し説明はあったのですが、企画展の満足度80%以上ということについて、少し補足していただければ助かります。菊池委員の意見を含めまして、補足願えればと思います。

〔事務局・沓沢〕：「満足度とは何か」という話になりますが、館内に2か所留め置き式のアンケートを実施しております。そして回答してくださる方はご自身の思いで書いてくださります。回答は5段階評価になっていまして、「総合的に満足できる」という設問に対して、5段階評価で4と5をつけた割合を満足度としてお示ししております。企画展の会期中に回収したもの、その企画展に対する満足度を集計して、企画展ごとの満足度を出しております。各年度の満足度につきましては、企画展ごとに回収数が違ってまいりますので、その誤差をなくすために、企画展の観覧者数と満足度を掛け算し、4と5をつけた人の割合を平準化して、企画展ごとの満足度を出しています。その掛け算を分子として、観覧者数を分母として、年度の満足度を出しています。柏木委員がご指摘のように、平成25年度からを見ましても年度ごとの満足度は向上している状況でございます。

〔小林委員長〕：いかがですか。

〔菊池委員〕：もう一つ聞きたかったのは、設定の中で80%という基準を設定したのは、どういう基準だったのでしょうか。

〔事務局・沓沢〕：※何年度からの経緯かというのは記憶にございませんが、開館当初は、企画展の満足度は70%程度を推移していました。一方で、アメニティ満足度は80%を超えていましたので、初期の評価委員会では、A評価の基準をどこに線引きするのかということが、大変議論になったということです。80%はその当時はかなり高い目標として設定したものと記憶しております。

※ 後日、経緯を確認。H22～23年度は70%に設定。H21～23年度の平均実績77.5%を受けてH24年度は80%に設定。H25年度は前年の最高値80.9%を超える81%に設定したが、H26年度以降は端数を切って80%に設定した。

〔菊池委員〕：そういうことなのですね。そのあたりのことも加味しながら、これから評価していかないと。

〔小林委員長〕：そのような意味で、Aという評価にさせていただきますが、そのあたりの問題をひとつ宿題にしながら。それからもう一つは、美術館の職員の方々が、すべて真摯に受けて、だから改善されたといった実感を持っていただき、そういうことを評価の中に組み入れていただく位の気持ちがあっても良いと思うのです。何かにつけ、横須賀美術館については、色々な形で世間の目が厳しい。こういう形で禁欲ばかりしていないで、良いことがあったらそれは出していただいて、出過ぎたら委員の人たちが厳しく言うでしょう。ですからそのことも踏まえて、今回はAということにさせていただきますけれども、そういう形で考えていただければと思います。

〔事務局・佐々木課長〕：委員長からの温かい言葉、大変ありがたいと思います。それを聞きましてやはり、少し改めて見る限りでは、菊池委員、柏木委員のご意見もごもっともだ

と思いますし、他の委員の意見も合わせて考えると、事務局として少しアピール度が、評価をしやすいするための記述としては、もう少し分かりやすく書くべきところもあったのかなと思っております。達成目標に関しましては、あくまでも数値ですので、この数値が、各委員それぞれが「このレベルまでいったら達成しているだろう」というところでSかAか判断されると思うのですけれども、それは各委員のお考えになってくるのだろうと思います。SにするのかAにするのか、という判断がしやすいように、ここにコメントを書かなければいけないのかと思いますので、一次評価も含めまして、今後に反映させていきたいと考えております。

〔小林委員長〕：そういうことを踏まえまして、ここでは一次評価どおりAということで二次評価をさせていただきます。それから実施目標ですが、いつもの項目が書かれております。この中で、いろいろご意見をいただいている委員の方からまずご意見を頂戴したいと思います。菊池委員にコメントも含めてお願いいたします。

〔菊池委員〕：達成目標である程度発言をしてしまったので、この実施目標についても同じような内容になるのですが、要は主催者側の狙いが来館者にしっかりと届いて、来館者もそれを納得しているということが質の担保につながっているのでは、ということでSにしました。

〔小林委員長〕：柏木委員いかがでしょう。

〔柏木委員〕：展覧会のラインナップにしてもバランスが非常に良いですし、展覧会に関連する事業もしっかり取り組んでいますので、取り組みの姿勢として私はSで良いのではないかと思います。

〔小林委員長〕：河原委員いかがでしょう。

〔河原委員〕：本当に様々な企画展を拝見し、ここにも書かせていただいたように、大人がゆっくりと楽しめるもの、子どもたちが楽しく見られるもの、そして親子で参加できるもの、といったように様々な企画展をしていただけたという点に加えて、またこの講演会や作家本人のトークは、伺ってから作品を見る楽しみという別の喜びもあって、こういった満足度につながったのではないかと感じました。A評価と書かせていただいているのですけれども、正直申しまして、極めて満足というか、どこからがSと判断したら良いのだろうと。ほぼ全部私も拝見させていただいているのですけれども、少しそこで迷ってAとさせていただきました。

〔小林委員長〕：他の委員、いかがですか。この達成目標と実施目標は結びついていると思いますし、本当は、きちんと意見が出ている評価を重視しなければいけない。ただ数だけではないと思うのですけれども、Aのところの達成目標等々の問題を整理するという

宿題も兼ねまして、こちらも一次評価はAということによろしいでしょうか。

では二次評価は一次評価同様Aとさせていただきます。

〔事務局・富田〕：17頁をご覧ください。「④学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する」です。達成目標は「中学生以下の年間観覧者数 22,000 人」ですが、平成 28 年度の中学生以下の年間観覧者数は 22,208 人となり、目標を達成しましたのでAとしました。

若年層に配慮した展覧会が目標達成につながったものと考えます。平成 28 年度は、夏に開催した「自然と美術の標本展」、ゴールデンウィーク期間中に開催した「さくらももこ展」が、家族層の来館を促す要因となったものと考えています。特に、「自然と美術の標本展」では、市立の全小中学校、幼稚園を通じて、全児童生徒にチラシを配布しました。学校からの配布物という信頼度の高い媒体で開催を周知することには、一定の効果があると考えられます。ただし、例年 3 つの展覧会で行っているこの全児童生徒向けチラシ配布を、平成 28 年度は予算の都合上 2 回に減らしました。また、例年、多くの来館者を集めている 11 月 3 日の無料観覧日が、「新宮晋展」という、比較的大人向けの展覧会に当たったことも、平成 28 年度の中学生以下の来館者が、平成 27 年度より多くならなかったことと関係していると思われます。

一方で、展覧会事業以外では、子供向けワークショップ、映画会等を開催し、また鑑賞活動の支援についても、幼児から中学生まで年齢に応じたプログラムを、質の向上に努めつつ実施しており、例年と同規模の参加者を得ています。続いて、実施目標について説明いたします。実施目標は、

- ・学校における造形教育の発表の場として、児童生徒造形作品展を実施する。
- ・学校および関係機関と緊密に連携し、子どもたちにとって親しみやすい鑑賞の場をつくる。
- ・子どもたちとのコミュニケーションを通じて、美術の意味や価値、美術館の役割などに気づき、考え、楽しみながら学ぶ機会を提供する。
- ・鑑賞と表現の両方を結びつけたプログラムを実施する。
- ・小学校鑑賞会を充実させるため学校との連携を強化する。鑑賞会と連動した教材の共同開発と活用、出前授業の実施などを教員と協力しながら実施する。

となっています。計画通り事業を実施しましたので、一次評価をAといたしました。

造形作品展および、市立小学校 6 年生全員が来館する鑑賞会は、継続して行っているものです。平成 28 年度の「小学生美術鑑賞会」でも、ワークシートの利用やマナー教育、また、アートカードによる事前授業を先生方にもおすすめするなどして、内容の充実に努めました。このほか、中学生のための鑑賞教室、子どもを対象としたワークショップ、市内中学校の職場体験への協力、年齢に応じた鑑賞活動支援、また、要望に応じて行っているのですが、アートカードにかかわる取り組みとして先生向けの研修や貸し出し等を行いました。

続く 19 頁には、次年度への課題を挙げております。ここでは、一年単位の目標設定ではカバーできない、長期的な視点に立った普及活動の取り組みについて記載しました。展覧会を子どもたちに見てもらおうことについては、展覧会の内容がやはり重要で、また広報に

よる部分も大きいかと思えます。一方で、美術館が教育普及の視点に立って、確実に積み重ねていかれることとしては、学校で行われている鑑賞教育のなかに、美術館が有意義なかたちで入っていくこと、そのための先生との関係づくりが重要ではないかと考えています。特に、学校および先生への働きかけの重要性をあらためて認識しているところで、その件に関して、特に詳しく課題として取り上げております。④については、以上です。

[小林委員長]: 年間の中学生以下の観覧者数の目標が 22,000 人ということで、今、小学生、中学生が少なくなっています。ですから数だけが上がれば良いという状況ではなくなっているわけです。今回、ここは皆さん A 評価ということですが、柏木委員から「この 3 か年で幼児の観覧者数が減っている理由はなんだろう」という指摘が出ています。それについて事務局から何かございますか。

[事務局・富田]: こちらで分析したところを申し上げますと、幼児の観覧者数というのは、展覧会の内容による増減の幅が非常に大きいです。特に、ゴールデンウィークまたは夏休みの展覧会の内容に左右されるようです。表の中で最も多い数字となっている平成 26 年度は、夏休みに開催した「キラキラ、ざわざわ、ハラハラ展」という現代美術の展覧会が、幼児を含む比較的若い家族層から大変な人気を集めました。平成 27 年度はゴールデンウィークに「ほっこり展」、夏休みに「ウルトラマン」、その後、11 月の無料観覧日には、絵本作家の「長新太」展と、家族層が足を運びやすい展覧会を多く開催していた年です。それらと比べると、平成 28 年度は、「標本展」以外は比較的、大人向けの内容でしたので、やはりそれが影響したと考えています。

[小林委員長]: この 22,000 人という目標は、数的な設定ですので、評価基準も定めやすいと思えます。そのうえで、一次評価も二次評価も、皆さんが A 評価とされていますので、ここは、二次評価 A ということでよろしいですね。しかしながらこの観覧者数というものについては、横須賀の中でも小・中学生の総数を把握しておかないと、これから厳しい状況になるのではないかという気がします。特に、この美術館は市の教育委員会の中で、教育の中にもうまく組み込んでいければということです。ですから、実施目標についても本当に教育の中に生かされているのかということです。その点、ご意見いただきたいと思えます。まずは菊池委員からお願いします。

[菊池委員]: 以前から感じていることですが、この美術館のスタッフの皆さんが、学校との連携について、非常に緊密にやられているということですよ。特に、アートカードは特徴的な取り組みで、それをいかに生かすかということが、やはりこの美術館と学校あるいは生徒とをつなぐポイントではないかと思っています。鑑賞会前のアートカードの活用が「4割」と書いてありますが、徐々にそうやって浸透させて、有効に活用されていると思います。直接、学芸員の方々が学校に行って、というのが一番良いのかもしれませんが、そうはいかないでしょうから、このアートカードが触媒になって、美術館と生徒を結ぶ力になれば、それがこの横須賀美術館の特徴的なことなのではないかと思って、S



評価にしました。

〔小林委員長〕：：柏木委員はいかがですか。

〔柏木委員〕：展覧会をつくっている学芸員が、同時にこのような事業をしているという意味でも、目標をどのように設定しているのか、その目標に対する取り組みがどうであったのかという分析もしっかりできていますし、課題についても洗い出しができています。また、行われている内容も非常に豊富ですし、横須賀美術館におられる学芸の方々のマンパワーに鑑みても、かなり努力をされているというところを評価したいと思います。前回はS評価だったわけですが、前年度に比しても遜色はないと思いますのでS評価としました。

〔小林委員長〕：河原委員、教育者としての観点からコメントをお願いします。

〔河原委員〕：学校現場からの生の声です。子どもたちは、美術作品に触れないで通ってしまえば、そのまま生活も授業もできてしまいます。ただ、そこで、作品との「出会い」があって、出会ったことで、もっと作品が見たいなとか、すごいなとか、そういうことを強く思うようになります。それは、造形作品展で、自分の作品が本物の美術館に飾られたという喜びとともにあると思うのですが、そこで同時に、ほかの作品も見ることができて、また見たいな、また来たいな、という気持ちを持つようになる子どもたちが多いです。また、アートカードについても、徐々に浸透していますし、先生方の中でも、またやってみたいという声があります。アートカードはサイズが小さいですから、細かいところが見えにくい。ですから、カードとしての扱いのよさに加えて、美術館に行けば本物が見られる、本物を見てみたい、という気持ちにつながるようです。さらに、現場の教員としては、学芸員の方たちに「こういうもので、参考になるものはないですか」とか、「こういうときに一緒にお手伝いしてもらえたら」という投げかけに対応していただけたらという声が上がっていますので、今後とも引き続きよろしく願いいたします。

〔小林委員長〕：樺澤委員はいかがですか。

〔樺澤委員〕：今の子どもたちがかわいそうだなと思うのは、子どものときから英語やパソコンを低学年から学んでいる。そうすると、本来の情操を教育する活動というのが圧迫されているのかと、素人ながら思っていたのです。ところが、今年の正月の末に、子どもさんたちの造形作品展を拝見しまして、これはすごい、将来は明るいなど、そんなふうに思いました。

〔小林委員長〕：：木下委員はいかがですか。

〔木下委員〕：以前から、この美術館は子どもに対して色々なことをやってくれていて、自

分の子どもにとっても、すごく良い勉強になったと思っています。ただ一つだけ厳しいことをいえば、小学生は学校の行事として必ず美術館に来る、中学生は夏休みの宿題として来る、というか来なければならないという面があって、もっと自主的に、小学生も中学生も学校関連でなく自主的に足を運んでもらえるような美術館になってくれたらと思っています。それでちょっと厳しくA評価にしたのですが、でも皆さんのご意見をうかがって、S評価でも良いと思います。

[小林委員長]：この観音崎という所に美術館があって、すごく良いところです、美術館の環境もすごく良いですといっても、なかなか小・中学生が利用するには不便だと。特に北のほうの小・中学生などは容易に来館できない。ですから、せっかく館長が教育委員会から来ておられますし、評価委員に校長先生もおられますから、学校教育の一環として美術館の利用がうまくできるような取り組みをしていただきたい。そうすれば、この美術館の存立の意味合いが、ただ単に観覧者数10万人ということだけではなくて、横須賀市のなかでの教育効果という面でも明確になってくると思います。そういう話も出たということ記録していただいて、皆さんのお話を総合しますと、ここは評価Sということによろしいですか。

では、ここはSといたします。

[小林委員長]：では続きまして、⑤の問題についてよろしくをお願いします。

[事務局・沓沢]：一次評価書の21頁をご覧ください。「⑤所蔵作品を充実させ、適切に管理する。」について説明します。この項目は、美術品の収集・保存・管理等に関するものです。達成目標は、環境調査を実施する回数2回、美術品評価委員会を開催する回数1回としております。いずれも、目標の回数を実施しておりますため、一次評価はAといたしました。

次に実施目標は、作品の収集活動、保管環境、修復・額装、作品の貸し出しについて、それぞれ望ましい姿を目標として掲げております。おおむね目標どおりの活動ができていますが、収集活動に関して、作品購入費の充当がされていない状況が継続しております。主体的、積極的な活動が制限を受けていることから、一次評価はCといたしました。⑤についての説明は以上です。

[小林委員長]：ありがとうございます。この達成目標に関しましては、柏木委員が専門家としてコメントを入れておられます。この辺を少しお話してください。

[柏木委員]：美術品の収集であるとか、あるいはその収蔵品の保管管理に関して言いますと、この美術館で行っていることというのは、基準、普通の美術館でやるべきことをきちんとやっていると評価できると思います。ここに、目標としてどうしても数値的な目標を立てなければいけないということで、収集の委員会とか、環境調査の回数を挙げてありますけれども、これはきっちりなされているわけです。その意味では目標値を達成している

という評価になると思います。

〔小林委員長〕ありがとうございます。皆さんここはAとなっておりますので、このまま受けとめさせていただいて、二次評価はAということでよろしいでしょうか。

次の実施目標ですが、なかなか厳しい状況です。まず権沢委員はBとして、もちろんCの評価基準の内、とありますけれども、ご意見を賜りたいと思います。

〔権沢委員〕：私の勘違いというのがあるかどうか分かりませんが、一生懸命努力したけれども結果としてCだったというなら、そうかなと思います。結局、収蔵品がなかなか思うように増えないというような議論がこの委員会出ていますし。ただ、それを補完するような形で今までずっと議論してきたような、まさにマンパワーで、色々な活動をなさっている。そういう目で見ると、Cというのは厳しいのではないかと思いました。

〔小林委員長〕：ありがとうございます。横須賀美術館は、作品購入の費用がなく大変厳しい。今は色々な形で、他の美術館と交換するなど交流ができていますが、だんだん細ってきて、代わりになにか見せてもらうものがないから嫌だなどと言われる時代が来ると大変かなと思うのですが、そのあたりも含めて、柏木委員がコメントをここに書いておられますので、お話しいただけますか。

〔柏木委員〕：やはり美術館にとってコレクションというのが柱であり、言い方が適切でないかもしれませんが、ある種「武器」であるわけで、国内の公立の美術館の場合は、他館から作品を借りて展覧会を作ることがなされていて、企画展が美術館の主幹事業になっていますので、そこを支えていくには、どういう武器をもって、お互いにそれを補完し合って展覧会を作れるか、ということがあります。

かつ、コレクションというのは市民の財産でありますので、やはり、美術館を設立した以上、それを維持していくうえで、財源を確保するというのは行政の責任だと思います。それは、1,000万とか2,000万とか一億とか、という話ではなくて、もっと少ない数字でも良いのです。たとえば、若い現代美術の作家のプライマリープライスだったら、100万、200万という数字でなくても買えたりするので、そういう意味で、若い作家を支援することも美術館としては必要ですし、そのためにはやはり財源が必要だと。

ここは美術館の努力でどうにかできることではありませんので、行政として、美術館の設立者として、そこをどう考えるかというところを、もう少し踏み込んでいただけないかと思います。

〔小林委員長〕：このあたりが重要な問題だと思います。やはり横須賀市の財政問題もあって、非常に厳しいということもあるのでしょうけれども、しかし逆に、いつも同じ話になってしまうかもしれませんが、ヨーロッパ、とりわけイギリスなどは、5万人もの都市になると、図書館とか美術館ないしは博物館みたいなものが、町のなかに設置されて当然のような状況になっている訳です。ですからそのことが、心の福祉とか、心の癒しの大きな

問題になっていて、そのような状況があると、非常に、中核都市として横須賀市はそれなりの活動をしている都市ですのでこのあたりが問題となります。

ただ予算がないからだけではなくて、色々な形で、せっかくの美術館をさらに効果的に市民のために動かすことの意義のようなことを併せて考えていただければと思います。これは美術館側の人としては言いにくいことだと思いますので、委員から、柏木委員が代表してくださったような形で出ていたと言っていたいただければ良いかと思います。そして、この状況を見ますと、やはりC評価ということで、よろしいでしょうか。

〔小林委員長〕：では次に、⑥の達成目標について、樺澤委員からコメントを頂戴していますので、ご意見をお願いいたします。

〔樺澤委員〕：コメントに記載したとおりですが、人的なホスピタリティについてはあまり分かりませんでした。ご覧のとおり、この施設は白を基調としていますが、白い建物を維持するのはとても大変なことだと思うのです。年々劣化するのは当たり前のことですが、劣化を抑えながら維持するだけでも大変な努力が必要だと思います、このような評価をさせていただきました。

〔小林委員長〕：ありがとうございます。そのような思いがあつてとのことですね。河原委員はいかがでしょう。評価どおりで良いということでしょうか。

〔河原委員〕：そのとおりで結構です。

〔小林委員長〕：木下委員はいかがでしょう。

〔木下委員〕：S評価でも良いと思う数字なのですが、いくつ以上がSなのかとか、判断が難しい面もあると思いました。

〔小林委員長〕：木下委員は実施目標でコメントしていただき、B評価となっています。草川委員はお見えになっていませんが、ご覧のようなコメントをいただいています。達成目標では、S評価の委員が3人、A評価の委員が4人ですが、いかがでしょうか。

〔菊池委員〕：私がS評価とした理由ですが、去年に比べて館内アメニティ満足度が0.5%、スタッフ対応の満足度が1.5%下がっていますが、ランクをSからAに下げるようなものではないのかなと感じています。草川委員がおっしゃるように、このようなことは大事なことでありますが、このレベルを維持するのは相当な意識を持ってやっているのかなと思うのです。これが、本当に意識がずれてくると、もっと幅の大きな落ち方をするはずなので、このレベルならばスタッフの方々のお客様に対する対応、満足度に向けた対応は保たれているのではと思います、昨年と同様にS評価としました。

〔小林委員長〕：ここで提案ですが、達成目標については、これからも素晴らしいアメニティを維持していただけるよう頑張ってくださいという気持ちを込めまして、S評価ということでいかがでしょうか。

では、評価をSとさせていただきます。次の実施目標については、木下委員がここでコメントをお書きになっていますので、お話しいただきたいと思います。

〔木下委員〕：細かいことになるかもしれませんが、ミュージアムショップに関しては前回お話しした時に、以前のミュージアムショップよりも内容のレベルが低下している旨をお話しさせていただき、改善をしてくださるという回答をいただきました。あくまで私の主観ですが、まだ変わっていないのかなという実感がありまして、もっと良くなるのではないかという期待も込めました。美術館に来る時には鑑賞することはもちろん楽しみですが、女性の場合はミュージアムショップで買い物をすることも楽しみだと思うので、今後改善していただければと思います。もうひとつ、これも細かいことかもしれませんが、経年劣化は仕方ないことかもしれませんが、ワークショップ室の前のドアに関して、私達ボランティアが出入りするだけのドアかもしれませんが、開かなくなって何年も経過していたり、今回10周年のイベントで裏側も使わせていただきましたが、普段は人も来ないし私たちも行かない所なのですが、汚れが見受けられました。劣化が少ないうちに直しておいた方が、大きくなるよりは良いのではないかと思い、今後に期待を込めてB評価とさせていただきます。

〔小林委員長〕：美術館の今後に期待を込めての評価ということですね。草川委員は、レストランのメニュー等々を褒めたコメントを寄せていらっしゃると思います。河原委員からは防災の面についてコメントをいただいていますので、ご説明いただけますか。

〔河原委員〕：防災訓練を実施されたという報告を拝見しましたが、人が沢山集まる場所でもありますので、このように災害に備えた訓練をされるというのは大変重要だと思っています。普段、何もない時でも、こちらに行ったらどこに出るのだろうと迷ったり、出口が分からなかったりと困ってしまう方もあるかもしれません。それがいざ、万が一という時には平常心ではいられず、より混乱してしまいますので、まずは職員の方たちが繰り返しこのような訓練をして、有事の際に適切に対応していただくことが安心につながりますので、ぜひ続けていただきたいと思います。

〔小林委員長〕：3.11の震災時に丁度ここで委員会が予定されていて、委員会が始まる前に大変な事態が起きました。委員会は中止になりましたが、美術館の職員の皆さんが、非常に手際良く観覧者の方々を誘導し対応されているのを拝見して、これは日頃からきちんとなさっているのだなと思いました。災害はいつ起こるか分からないので、このようなこともアメニティの一環として取り組んでいただければと思います。

では、こちらの実施目標については、一次評価と同様にA評価ということでよろしいでしょうか。

よろしいようですので、A評価とさせていただきます。

〔小林委員長〕：では次に、⑦の問題について、よろしくお願いします。

〔事務局・沓沢〕：一次評価書の27頁をご覧ください。「⑦すべての人にとって利用しやすい環境を整える」について説明いたします。横須賀美術館では、開館以来、障害のある方と美術の接点について考えるための活動を続けております。この項目では、障害者に関連する事業のほか、小さい子どもへの福祉なども含めた、福祉関連事業について評価しております。

達成目標は、「福祉関連事業への参加者数のべ400人以上」としていました。平成28年度の実績は、359人となり、目標を下回りましたため、一次評価はBといたしました。福祉関連講演会の参加者数、およびみんなのアトリエの参加者数は例年並みとなっておりますが、目標には及びませんでした。広報や運営の仕方によっては、より多くの方が参加できる可能性がまだあると考えております。パフォーマンス、ワークショップにつきましては、内容とねらいを明確化し、多くの方に参加していただくことができたと考えています。

託児サービスの受託人数は例年より減少しております。これは、イベント参加に付随した利用が少なかったためです。イベント参加に付随した利用につきましては、抽選の結果にも左右されるため、ニーズが減ったものとはとらえていません。定期的な託児、これは月に2回程度設けていますが、これの受託数は27年度よりも増加しており、この託児サービスは浸透してきているものと考えられます。

実施目標につきましては、「年齢や障害の有無などにかかわらず、美術に親しんでもらうための各種事業を行う」こと、「必要に応じて、対話観賞等の人的サポートを実践する」ことを挙げております。28年度も、福祉に関連した各種の事業について積極的に取り組んできたことから、一次評価はAといたしました。⑦についての説明は以上です。

〔小林委員長〕：ありがとうございます。皆さんBが多いようですが、菊池委員と柏木委員のコメントがありますので、説明を願いたいと思います。まずは菊池委員よろしくお願いします。

〔菊池委員〕：この目標の設定は、いわゆる福祉関連の方々だけに対するものではなくて、誰でもが融合し合えるような場ということだと思いますので、色々とコメントを書いたのは、託児目標というのはそぐわないのかという気がしたためです。説明では、サービスとしては認知度が高くなったが、人数は少なかったということで、結局この中では評価の対象としてマイナス側面がでていくわけです。このようなものはあくまでもオプションなので、目標値に入れるのはどうかと思っています。ですから、下にも書きましたが、サービスをPRすることは当然の話ですが、それを目標値として設定するのはどうなのかと、懸念として挙げています。

また、障害者向けワークショップについては、27年度と28年度の設定値の違いが良く分からないので、説明が必要かと思いました。

〔小林委員長〕：この点については、事務局としていかがですか。

〔事務局：沓沢〕 ご指摘にありました障害児者向けワークショップ「みんなのアトリエ」を年間 12 回実施していきまして、参加者数については、数字の上から見ると、ここ数年横ばい状態であり増減はありません。昨年度の評価の際には、やはり数値目標的に下回っているということでBとなってしまう、目標設定自体が適切でないのではというご指摘を受けました。また、担当の者に良く聞いてみると、もう少し沢山参加できる余地があるのではないかと考えているということで、美術館の側からの一次評価として、伸びしろがあるということを含めてのB評価としました。

みんなのアトリエは、10 組くらいずつの定員で年 12 回開催しておりますので、付添いの方なども含めると、200 人以上のご参加があっても良いわけです。たとえば当日のご本人の体調等で欠席となる場合もあります。抽選になる場合もありますが、受け入れていても、急にお休みになる場合もあるということなので、美術館が計画しているよりも参加者が減ってしまうということがあるようです。

また、これからの伸びしろということで申しますと、福祉関係の講演会を開催しております。これはいつも 30 人程度のご参加ですが、キャパシティとしてはもう少し、40 人 50 人と来ていただいても良い。そのために広報の仕方を、より関係各所に良く知っていただく努力をしていく余地があると考えています。

〔菊池委員〕：2 番目の、障害者向けワークショップがありますね。平成 27 年度の数値の出し方と、28 年度は 26 年度以前と同じですが、人数が大幅に変わっていますね。その辺りはどうなのでしょう。

〔事務局・富田〕：障害のある方もご参加いただける事業をとして、ワークショップとパフォーマンス・アーツのイベントを年間 1 本ずつ開催するつもりだったものを、平成 27 年度から、ワークショップでもパフォーマンス・アーツでも良いので、年 2 回実施する方向で組み替えました。それがこちらのまとめ方に現れていきまして、平成 28 年度に関しては、ワークショップを実施し、また聴覚障害者の方がご一緒になさっている人形劇のパフォーマンスを実施したので、それを分けて記載しました。27 年度に関しては、どちらもワークショップという形式で実施したので、数字が一体化しているという違いです。

〔菊池委員〕：そうですか。これは数値目標なので、平成 26 年度については障害者向けワークショップもしくはパフォーマンス年 2 回と書いてあり、これは二つ足すと約 200 名位で、27 年度からは方針が変わって、27 年度は 45 名、28 年度は 84 名ということで、この 400 人以上という目標が、そのまま良いのかということも考えなくてはいけないのではないかと思います。

現状でもそのように色々と考えながら対応していくことで、この 400 人という設定は正しいということであれば良いのですが。目標設定の 400 人というのは、26 年度も多分変わってないと思うのです。このときの設定の仕方と今の対応の仕方の設定とでは、やはり目

標数値が変わっていると思うのです。それが妥当なのかということで設定しておかないと、評価に影響するのです。ずっとBになっていくということになりますので。

〔事務局・富田〕：補足をさせていただきますと、平成 25 年度、26 年度で、数値目標を大きく超えているのが、平成 25 年度のパフォーマンスの 125 人、平成 26 年度のパフォーマンスの 151 人という数字です。それぞれ音楽やダンスのイベントをやったもので、大勢来ていただいて非常に好評でしたが、担当者としては若干反省点がございまして、本当に障害のある方に情報が届いたのかという点では、必ずしもそうではなかったのかな、ということがあります。イベントはどなたでも参加していただけますが、本当に対象とした方たちに届いたのかというと、そうではなかったという気がしております、それで 27 年度、28 年度は、何でもパフォーミング・アーツであれば良いというのではなくて、もう少し福祉寄りといいますか、趣旨に即した内容でやろうということで、ダンスでも音楽でも何でも良いという考え方を反省的に捉え、事業を企画したという面があります。

数値目標に関して申しますと、いま 27 頁に上がっている表の中で、本当に障害のある方々に実際に足を運んでいただかないと成り立たない事業というのが、「みんなのアトリエ」の部分です。こちらに関しては、先程、杳沢から申し上げましたとおり、もう少しご参加いただける余地があるのではないかと考えておまして、当美術館を利用される特別支援学級や、養護学校などに対してチラシをお渡しして、それぞれの方に個別にご参加いただける形にしたかどうか、なるべく障害をお持ちの方に親しんでいただけるような工夫が、まだまだできるのではないかと捉えて、数値を次年度はまた少し上げています。目標値としては妥当であると思っております。

〔菊池委員〕：分かりました。そうであれば問題ないと思いますし、いまの検証は非常に大事なところで、そのようなことが繰り返されていけば、来場者の方にも気持ちとして伝わりますので非常に良いことだと思います。それで実態と設定している目標値に齟齬がないということであれば良いと思います。

〔小林委員長〕：柏木委員いかがですか。

〔柏木委員〕：目標設定の理由のところにも書かれていますが、その年の事業の性格次第で参加数に変動要素がかなりあると書かれていまして、平成 27 年度について 28 年度の実績を見た時に、果たして最初の目標設定が本当に適切であったかどうかということの分析が必要だということと、菊池委員からもご指摘がありましたけれども、事業への参加者数と託児のようなサービスの享受者の数が同じ評価軸の中にあるというのは、少しおかしいかもしれないと思います。

〔小林委員長〕：ありがとうございます。委員の方々から色々コメントもいただきましたが、全体としては一次評価通り B ということでよろしいでしょうか。

次に実施目標について、私だけ評価が悪いのですが、これは、実施目標に「年齢や障害



の有無等にかかわらず、美術に親しんでもらう環境づくり」とあり、達成目標が福祉関連事業への参加者延べ数 400 人以上ということに対しては訳ですが、では障害者に配慮しての福祉関連事業ということを考えて場合、一般参加者との状況は異なる配慮というものが、もう少しこの実施目標の中にあっても良いのではないかということで、Bとさせていただきます。良くやっていると思いますが、達成目標を福祉関連事業への参加者とするのであれば、託児サービスというようなものについて、もう少し考えていただければということです。菊池委員から「託児サービスのPRは必要だがあくまでもオプションであるため、目標値にそぐわない気がする」とコメントがありますが、ご意見がありましたらいただきたいと思います。

〔菊池委員〕：以前にも一度ご指摘をさせていただいていますが、先ほど柏木委員からもありましたとおり私も思っております。託児サービスのPRが行き届いているのに、人数が少ないことによって評価が変わるというのは、評価の中に組み込むのはいかがなものかと思っています。

〔小林委員長〕：分かりました。そして、柏木委員の「来年度への課題」の課題をどう解決するか、これについて提起してくださると助かります。

〔柏木委員〕：「次年度への課題」で2つの項目が上がっていますが、「みんなのアトリエ」についての課題などです。養護学校や支援学級についての課題が上がっていますので、そこを次年度に向けてしっかりと見直すべきところ、あるいは継続すべきところを、検討していただけたらということです。

〔小林委員長〕：ありがとうございます。全体を見ますと、一次評価通り、二次評価はAということでもよろしいですか。

では次に、⑧について移りたいと思います。達成目標について二次評価はAとBに分かれています。直近3年間の平均値を目安とするという目標について、なぜそうなったかという分析をすることが大事だと思います。これについてご意見はありますか。

〔菊池委員〕：柏木委員のご指摘にもありましたが、この項目というのは、スタッフの皆さんが日常的に意識をしながら最終的にきっちりと検証をするということができてさえいれば、多分それで良いのではないかと私は思うのです。これは死守するということはなかなかできることではありませんし、その代り、以前も申し上げたとおりS評価というものもなかなか付き辛いところですので、ここにありますようにきっちりと意識を持って取り組んで最終的な結果を分析できているということでA評価とさせていただきます。

〔小林委員長〕：木下委員いかがですか。

〔木下委員〕：あくまでも目標に対して下回ったということでB評価とさせていただきます。

たが、無駄遣いをしている訳でもなく、適切な増加だと思しますので、A評価でよろしいかと思ます。

〔小林委員長〕：入場者が多くなったり暑い日が続いたりすれば、努力をしても、環境を維持するためには経費が掛かってしまうので、今いただいたご意見を勘案するとA評価でよろしいのではないかと思ますが、いかがでしょうか。よろしいですか。

では、達成目標はA評価とさせていただきます。次の実施目標についてですが、皆さんの評価どおりA評価でいかがでしょうか。よろしいですか。では実施目標についてもA評価とさせていただきます。

では、改めて①の項目から確認させていただきます。①の達成目標がA、実施目標がA、②の達成目標がA、実施目標がA、③の達成目標がA、実施目標がA、④の達成目標がA、実施目標がS、⑤の達成目標がA、実施目標がC、⑥の達成目標がS、実施目標がA、⑦の達成目標がB、実施目標がA、⑧の達成目標がA、実施目標がAというように二次評価をさせていただきました。ほとんどの評価が一次評価と同じということで、美術館側の自己点検が行き渡ってきているなど感じました。事業評価についてはこのようにまとめさせていただきました。では、次の議題についてよろしくお願いたします。

〔事務局・佐々木課長〕：ありがとうございます。二次評価につきましては、本日の確定内容をまとめ、評価報告書に加えまして、出来上がり次第、各委員に送付させていただきます。皆様には、最終のご確認をいただき、修正等ございましたら、朱書き等訂正によりご返送いただきたくお願申し上げます。その後は、委員長一任として完成としたいと考えます。

次の議題は、平成29年度事業計画書について、説明をさせていただきます。本年3月に開催した本委員会でご意見をいただき、事務局で再度検討、修正し、完成したものが、本日配布させていただきました。資料2「平成29年度事業計画書」となっております。修正いたしました事項を中心に、事務局から説明させていただきます。①から⑧まで通して説明いたします。

〔事務局・相良〕：では資料に基づき説明させていただきます。事業計画書の2頁をご覧ください。前回の評価委員会でのご意見を踏まえまして、横須賀美術館開館10周年記念企画の概要を一覧できるような頁を追加いたしました。

続きまして3頁をご覧ください。「I 美術を通じた交流を促進する」のうち、「①広く認知され、多くの人にとって横須賀を訪れる契機となる」の事業計画につきましては、変更はございません。1 展覧会の実施、2 広報・集客促進事業としては、それぞれ記載のとおりです。

次に4頁をご覧ください。達成目標につきましては年間観覧者数10万人以上を目標としました。変更点としましては、4頁の下段の達成目標の説明の中で、平成27年1月末の数字を3月末の数字に変更しました。

次に5頁をお開きください。実施目標につきましては変更なく5つの項目を設定してい

ます。目標設定は記載のとおりでございます。私からの説明は以上です。

[事務局・沓沢]：続きまして6頁、「②市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる」につきまして説明いたします。申し訳ありません、1か所訂正がございます。6頁の(1)ギャラリートークボランティアの活動日数は、年55日となっておりますが、平成29年度からは、ボランティアの活動機会を増やすため、毎週日曜日に加えて、祝日にもギャラリートークを可能な限り行うことといたしました。従いまして、年間ではおよそ10日間の増が見込まれます。したがってこの55日というところを、約65日と訂正いたします。ギャラリートークについては約60回になろうかと思えます。

次に7頁の表(市民ボランティア協働事業への延べ参加者数)におきましては、28年度の活動人数を3月末までの実績に基づいて書き改めています。②については以上です。

[事務局・工藤]：続きまして9頁をご覧ください。「③調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす」について説明いたします。次の11頁をお開きください。「達成目標企画展の満足度80%以上」について、前回お渡しした資料が1月末時点の数値だったのを、3月末までの数値に直し、平成28年度を88.0%といたしました。ここで一つ、訂正をさせていただきます。この事業計画書ではなくて、先ほどご覧いただいた「平成28年度運営評価報告書」の11頁ですが、ここにも同じ「企画展の満足度」が書かれております。こちらは88.2%となっておりますが88.0%に修正をお願いします。事業計画書に戻ります。実施目標はかわらず変更はありません。

[事務局・富田]「④学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する」について説明いたします。この項目のうち、前回から訂正した部分については14頁、中学生以下の観覧者数の数値でございます。平成28年度3月末の数値が確定いたしましたので、この表にありますとおり、数値を書き改めております。平成28年度の中学生以下の観覧者数は22,208人で、この数値に基づき、平成29年度の中学生以下の観覧者数の目標を22,000人といたしました。

[事務局・沓沢]：続きまして16頁、「⑤所蔵作品を充実させ、適切に管理する」の項目につきましては、特に変更したところはありません。

[事務局・高橋]：続きまして⑥についてですが、19頁上段の表の、平成28年度の数値を最終数値に修正した他には、基本的に前回お示ししたのから変更はございませんが、二次評価でご指摘がありました、スタッフ対応やミュージアムショップの満足度を含め、利用者の満足度を高めるため受託事業者と一層の連携を図って参ります。また、開館から10年が経過し、施設の経年劣化もかなり進行しておりますので、修繕等を適切に行なってまいります。⑥については以上です。

[事務局・沓沢]：続きまして、20頁からの「⑦すべての人にとって利用しやすい環境を整

える」という項目です。21 頁の表（福祉関連事業への参加者数）のところで、平成 28 年度の実績を 3 月末までの数値に書き改めております。それから、託児の目標人数を合算することについて、菊池委員より問題提起を頂いたところですが、現在 29 年度の目標としては 30 人で入っております。29 年度はそのままとさせていただいて、今後の検討課題としたいと考えております。

[事務局・秋山]：続きまして 22 頁をご覧ください。「⑧事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に運営・管理する」の事業計画について説明いたします。表の中の平成 28 年度の数値を年度末のものに修正したほかに、電気使用量について、昼間と夜間の内訳の欄を廃止しました。理由としましては、この事業計画では、年間の合計使用量を目標値としていて、昼間と夜間の目標値をそれぞれ目指すといった取り組みではありませんので、年間使用量だけを目標値として掲げることといたしました。引き続き、職員やスタッフ間でコスト意識を保ちながら事業を進めてまいります。⑧の説明は以上です。

最後になりますが、事業計画書 23 頁に平成 29 年度予算を掲載しておりまして、こちらは 3 月にお示ししたのものから変更はございません。今年度はこの予算に基づき事業を執行してまいります。

[小林委員長]：ありがとうございます。今説明いただいた平成 29 年度事業計画書についてご質問がございましたらどうぞ。

[柏木委員]：⑦の達成目標 420 人以上という数値は適切なのでしょうか。

[事務局・沓沢]：平成 29 年度に開催予定の事業内容に基づき積算しました。28 年度に比べて内容が増えた分を加算しました。

[小林委員長]：他にご質問等ございませんか。よろしいですか。では、この事業計画書にしたがって今年度の事業を進めていただければと思います。次に、「3 その他（1）今後のスケジュールについて」、事務局から説明をお願いいたします。

[事務局・秋山]：「資料 3 今後のスケジュール」をご覧ください。まず、本日ご議論いただきました評価結果を基に評価報告書を作成し、委員の皆様へ送付の上、ご確認いただく予定です。その後、教育委員会への報告を経て、公開の運びとなります。

また、本年度が委員改選の改選年度になっておりまして、現在の委員の皆様は 9 月末となっております。7 月中旬に公募の市民委員が決定する予定で、10 月に新委員の委嘱となります。その後は、例年同様、中間報告から事業計画へという流れで進めてまいります。今後のスケジュールについては、以上です。

[小林委員長]：今後のスケジュールについて、ご質問はございますか。ないようでしたら、事務局お願いいたします。

[事務局・佐々木課長]：先程の話にもありましたが、委員皆様の任期が9月末までということですので、このメンバーでの会議は今日が最後となります。2年間本当にありがとうございました。